大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

主体・主体化あるいは専門知

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-08-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 児島, 亜紀子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00003203

主体・主体化あるいは専門知

児　島　亜紀子

序

本稿では、社会福祉学における援助領域（一般にソーシャルワークと呼称される領域）の基底に存する「価値」の問題をとりあげる。ソーシャルワークの「価値」――援助という営みの思想的基盤となる当のもの――について考察するということには以下のような意義があるものと考えられる。すなわち、援助という実践活動は、何らかの価値に基づいて行われる。援助者がどのような価値を拠り所とするかによって、援助の方向性は規定される。換言すれば、援助者の個人観、社会認識、個人と社会との、あるいは援助者とクライエントとの「関係性」の捉え方によって、援助の方向が規定されるのである。

本稿では、ソーシャルワークがいかなる個人観をその基盤に据えているかということを中心的な主題として行論を展開する。そこから、ソーシャルワークの専門性、専門知が、ソーシャルワークにおける個人観とどのように関わり合っているのかを明らかにしたい。そのためには、権力、主体、主体化作用などの概念を検討することになろう。近年、ナラティブ・アプローチなどの興隆に見られるように、ポストモダン思想がソーシャルワーク領域にも影響を与えつつある。それとともに、ソーシャルワーク理論の前提をなす価値は、はたして変更を余儀なくされたのだろうか？ソーシャルワークの近代性が、たとえ部分的であれ、超克されたとみることは可能だろうか？そうした点の検証も含めて、価値、わけてもソーシャルワークが前提とする個人観に内在する問題を捉え返すことは、それなりに重要な作業であると考える。

価値と政治

ソーシャルワークにおける価値の問題を取り扱うにあたり、行論の冒頭で触れておかねばならないのが、社会福祉におけるミクロな「政治」に関する問題群である。

なぜ政治なのか。結論を先取りすると、ソーシャルワークにおける価値は、ソーシャルワークに内在するミクロな政治と不可分であるためである。ミクロな政治は、「力」わけても権力、および権力作用と密接な関係を持つ。ミクロな政治は、わが国で従来政治学の対象とされてきたような、いわゆるマクロな政治の内包する「支配と統治」という概念を取り込みつつ、同時にマクロな政治とは異なる位相を持つものとして立ち現れる。

政治というとき、おそらく人びとは次のようなことを念頭に置く。つまり、社会ないし集団において、対等な成員による相互行為によって秩序が形成されることを理想とするものが政治であるのだと。その前提には集団や社会には統一的な決定を作り出す能力があるという仮説がある。特定の人間が権力を背景とし、多数の被治者に秩序を付与しようとするとき、それは「統治」と呼ばれる。マクロ政治は支配の力と関わっており、中央政府と地方政府、政府と「市民」との間に生い立つさまざまな力を媒介にして、展開される。われわれはともすれば政治を国家や、政府や、利益諸集団に関わるような、何かしら可視的な装置であるように捉え、政治に関わるか、関わらないかは個々人の意志によって決定できるかのごとく考えてしまう。

しかし、ミクロな政治は、そこに参加するかどうかをわれわれ自らが選び取ることのできるような性質のものではない。ミクロな政治は、つねにそこにある。細かな網目であると同時に、われわれを引き寄せ、包摂する磁場のようなものとして。

とはいえ、ミクロ政治が支配と服従の様式に関わっていることには変わりがない。それでは、ミクロな政治が磁場であるというのはいかなる意味か。このことをフェミニズムを例にひいて説明してみよう。ミレットがフェミニズムの古典として知られる『性の政治学』を著したとき、そこでいう政治は普遍的な父権制に支えられた支配装置を作り出すものとして捉えられていた。

ミレットは次のように述べる。「『政治』という用語は権力構造的諸関係、すなわち一群の人間が他の一群の人間に支配される仕組みをさすものとする」(Millet 1970: p.69)。ミレットにとって、政治という語を用いるのは、それは何よりもこの言葉が男女という両性間の相対的地位の本質を明らかにするのに有効であったためである。すなわち、抑圧者としての男性、従属する側としての女性という関係が、普遍的なものとして制度化されていることを、「性の政治」という概念は暴き出したのである。ミレットにとって、そして続くフェミニストたちにとっての政治とは、伝統的な政治概念で示されるようなものではなく、個人化された政治、すなわち女性の身体や女性の経験、女性の役割とされてきたケアという行為をめぐる力・イデオロギー・それらを記述する言説のせめぎ合いを示していたのである。

フェミニズムのバイブルとして広く読まれ続けてきた『性の政治学』における政治概念は、目に見えない、にもかかわらず社会の間に根を張っている制度を作り出す力に目を向けさせることに成功した。制度はわれわれの無意識の中に張り巡らされている。たとえば異性愛という制度。性差という制度。それらはつねにすでに、われわれの身体に書き込まれてしまっているかのごとくである。

ミレットの提起した政治概念は、フーコーの『知への意志』において提示された権力概念とも重なり合う。ここで改めて、フーコーの示した権力についての考察に目を向けてみよう。フーコーによれば、権力は以下のような5つの特徴をもつものとして説明される(Foucault 1976=1986: pp.121-124)。

① 権力とは手に入れることができるような、奪って得られるような、分割されるような何物か、人が保有したり手放したりするような何物かではない。

② 権力の関係は他の形の関係(経済的プロセス、知識の関係、性的関係)に対して外在的な位置にあるものではなく、それらに内在するものである。

③ 権力は下から来る。権力の関係の原型には、支配する者と支配される者という二項的かつ総体的な対立はない。生産の機関、家族、局限さ

れた集団、諸制度の中で形成され作動する多様な力関係は、社会体の総体を貫く断層の広大な効果に対して支えとなっている。

④ 権力の関係は、意図的であると同時に非－主観的である。一連の目標と目的なしに行使される権力はないが、そのことは権力が個人である主体＝主観の選択あるいは決定に由来することを意味しない。権力の合理性を司る司令塔のようなものは存在しない。

⑤ 権力のあるところには抵抗が存在する。しかし、抵抗は権力に対して外部にあるのではない。抵抗の点、その節目、その中心は、時間と空間の中に、程度の差はあれ、強度をもって散らばされており、時として、集団あるいは個人を決定的な形で調教し、身体のある部分、生のある瞬間、行動のある形に火をつける。

ミレットの政治概念は、フーコーの提示した権力についての考察の②と⑤に深く関わっている。ミレットは支配する側（男性）と、従属する側（女性）という二項対立図式を念頭に置き、家父長制という制度がかかる支配構造を創り出すものとした。この時点でミレットは、「権力は局在する」という伝統的なシェーマから自由になってはいない。しかし、フーコーの述べるように、力作用は「時間と空間の中に」あまねく散らばっている。磁場という譬喩が指し示すのはまさにこの点である。力作用はやがて制度化というかたちで結晶する。われわれはミレットの政治概念、フーコーの権力理論から権力構造、権力関係、制度化といういくつかの有効な手がかりを得ることができる。社会福祉の政治は、「援助」をめぐる政治である。社会福祉、（あるいは）ソーシャルワークという営みの中に、権力構造、権力関係、制度化は磁場のように渦巻いている。

ソーシャルワークにおけるミクロ政治

ここで、ソーシャルワークに内在するミクロな政治について整理しておこう。ソーシャルワーカーが「主体化」作用（＝主体を形成する作用）[1]に巻き込まれていること、かかる主体化作用が作動した結果、〈主体〉となったワーカーは、

主体としての価値に基づき、クライエントの「問題」を判断する。主体化したソーシャルワーカーのもつイデオロギー、価値、専門知、これらはミクロ政治の重要な契機である。程度の差こそあれ、援助者が有する「個人観＝人間観」「社会認識」は、被援助者たるクライエントの抱え持つ生きがたさを特定の「問題」として規定し、場合によっては、被援助者は援助者の有する「主体としての価値」を取り込むよう促される。すでに主体化作用によって主体化されているのはクライエントも同様である。クライエントは、ワーカーによっていっそう主体としての価値を体現するよう方向付けられ（自立を！自己決定を！というスローガンを想起せよ）、もって主体化作用は援助の場においてふたたび作動し、主体化は強化され、再生産されるわけだ。むろん、援助者の思い描く「主体化」のプロセスを拒む人びとも存在する。彼／彼女ら――これらの人びとは、もはやクライエントと呼ばれないのであろうか？――は、たとえば「クイア」と呼ばれることを逆手にとり、クイアというきわめて嘲笑的な言葉が、権力装置である言語実践の結果であることを身をもって示すことで、制度化された主体として自らを定立するのに抵抗している[2]。

しかしこういったからといってまだ充分ではない。われわれはもう少し考察を先に進める必要がある。ふたたび、「磁場」という言葉にこだわってみよう。磁場という概念が直截的に示すのは、政治という領域が実に広大であることなのだ。つまり、さまざまな権力装置の作動によってもたらされる、人びとへの可視的な抑圧、支配や統治、それだけが政治の対象として考察に値するものなのではないということを「磁場」という概念は示唆している。いわば不可視のものもまた、われわれのいう政治の範疇には組み込まれるのである。

不可視のものとは何か。それは主観的なものであり、魂であり、心理であり、私的幻想までをも含むものである。ペルベルトは次のように述べる。

「『見えないもの』は知や権力や主体化の様態に絡みついており、また、われわれを包み、支え、交わらせている…（中略）『見えないもの』をプログラム化することはできない。それはただ探索することだけができる」（Pelbert 1993＝1994: p.173）。ペルベルトのいうように、「見えないもの」を体験することは、「幻覚者や透視者、麻薬使用者、芸術家、精神分析の被分析者、預言者」の専有物ではない。「見えないもの」は「またその本質において技術的、

社会的装置に結びついており、政治的に思考されねばならない」(Pelbert 前掲、p.176) そのためには「『見えないもの』を脱個人化し、脱想像化すること、それに出来事としての、潜在性としての濃密さを取り返してやること」が必要であるとペルベルトは述べる (Pelbert 前掲、p.176)。後述するナラティブ・アプローチは、このような思考方法の手前まできている。筆者の考えでは、ソーシャルワークにおけるいずれのアプローチをとろうとも、「見えないもの」の政治性を確認すること――なぜなら見えないものもまた、知や権力や主体化の形式と深く関わっているのであるから！――は重要である。さらに、われわれが主体化という政治の磁場のうちに取り込まれており、なんぴとも――むろんソーシャルワーカーといえども――磁場の存在に無自覚である限り、主体化のプロセスに包摂され続けること、このことを心に刻むべきなのだ。「主体性の土壌としてのミクロ一政治学」とネグリが指摘したように、主体が主体化される磁場の中で、主体として結晶する以前のさまざまな〈私〉が出来事として物語られるべきではないのか？

――いささか結論を急ぎすぎたかもしれない。しかし、主体、わけても理性的な主体、自律的な主体という、伝統的なソーシャルワークにおける大きな価値は、さまざまな形で再考を迫られざるを得ない。以下の節で、そのことを確認していこう。

主体の概念

ここまで、特に主体という言葉について規定せずにきた。改めて、この概念を整理しておこう。伝統的に主体といえば、デカルトのコギトであるような主体である。思惟する主体、自然を語る言語を生み出す主体。デカルト的コギトは、現実を説明する（場合によっては現実の不可能性を説明する）ための論理的な出発点であり、科学の基礎を主体の確実性へと繋ぐ（コフマン編『フロイト・ラカン事典』弘文堂、1997を参照)。近代科学の歩みのためには、「思惟スル」デカルト的コギトが前提となるのである[3,4]。

デカルト的コギトであるような主体は、どのような問題をその内部に包含しているのか。現在指摘されている論点は概ね以下のようなものである。

① 主体が科学の主体であることから、結果として科学偏重主義に陥り、環境破壊などを進めたこと。
② 主体とは理性的であるという前提が、20世紀の2度にわたる大戦によって瓦解したこと。
③ 心身二元論に代表されるような二項対立図式が、一般的なものと特殊なもの、優れたものと劣ったものという、有徴化（しるしづけ）の問題を呼び込むことになったこと。
④ 哲学的には、コギトが自己言及的な概念であり、存在の根拠が問えないこと。

しかし、デコンブが示唆するように、これらランダムに並べられた主体に関する批判のうちには、奇妙な混同がある――主体とは、なるほどデカルトのコギトを哲学的主体の長い系譜の始点に措いている。しかるに、主体批判とは、主体の概念や、「そのありうべきさまざまな適用、その妥当性に向けられている」（Descombes 1989＝1996: p.186）のである。すなわち、「一方では、みずからを主体と考えるよう人々を駆り立てる、時代の精神や『主観性の形而上学』が非難される。すなわち、どんな人でも、多かれ少なかれ、『わたしはわたしの思考、欲望、行為などの主体である』と自分に言い聞かせねばならないという命令の下におかれている。（中略）だが他方では、主体の概念は夢想のごときものと判断される。思考する主体、欲望する主体、書く主体、戦う主体、等々といったものを信じることが幻想なのである。」（Descombes 前掲、p.186）主体批判か、主体化批判か。あるいは主体化作用批判か。これらが問いのうちに混在していることが、主体をめぐる問題をさらに複雑にしている。

ソーシャルワーク理論に見られる「主体」についての疑問

1）生態学的アプローチ

ソーシャルワーク領域では、ごく最近まで、近代的主体批判という事柄にはほとんど関心が払われてこなかった。ソーシャルワークが近代の落とし子である以上、そこで前提とされる個人がデカルト的コギトを淵源とする「思

惟スル主体」であることは、ほとんど自明のことであった。事実、バイステックの7原則に代表されるソーシャルワークの理念からは、デカルト的自我、コギトを想起させる個人の相貌が浮かびあがってくる。しかしながら、後述する社会構成主義アプローチの影響もあって、1990年代の後半以降は、わずかながらわが国のソーシャルワークの専門誌にも「主体」ないしは「主体性」を考察しようとする論文が散見されるようになっている[5]。これらの論文が依拠する主体概念は、いずれもフーコーの主張に基づいたものである。すなわち、主体とは「自発的に権力に服従する主体」であるというのがその主張の骨子である。フーコーはベンサムのパノプティコンを例に引いて、次のように述べている。「これは重要な装置だ、なぜならそれは権力を自動的なものにし、権力を没個人化するからである。（中略）可視性の領域を押しつけられ、その事態を承知する者（つまり被拘留者）は、みずから権力による強制に責任をもち、自発的にその強制を自分自身に働かせる。」（Foucault 1975＝1977: pp.204-205）。主体、わけても近代的主体とは、規律・訓練を通して、自ら権力に服従する主体であるという見方がここには示されている。かかる主体の捉え方が、ソーシャルワーク研究にもたらしたものは何であったのか。そのことを検討する前に、まず、わが国のソーシャルワーク理論において、現在もなお影響力を持ち続けている「生態学的アプローチ」を例にとり、ここで個人ないし主体がどのように捉えられているかを見ていくことにしよう。本論考がここで参照するのは、『ソーシャルワーク研究』に1995年に発表された平塚良子の論文「生態学的アプローチのパラダイム分析と今後の展望」である。平塚論文は生態学的アプローチの特徴を手際よく整理しており、また、直接的ではないものの、本稿において重要な主題である「主体と価値」の問題をも採りあげている。

平塚は「生態学的アプローチの今日的な意義ないしは意味をあらためて問い直すことは社会福祉実践における専門的な独自の視点や価値、方法を築くための重要な論点」（平塚 p.15）としている。平塚によれば、このアプローチの方向性は次のように整理される。

① このアプローチの原型はジャーメインの1968年の論文に見ることができ、それは援助の対象となる単位は「状況の中の人間」であり、クライエ

ントのパーソナリティを単に対象とするものではないこと。

② 具体的には、クライエントの生活過程や適応的な対処能力、治療可能性を持つソーシャルサポートの活用を志向すること。

また、このアプローチは生態学をメタファとしている。平塚によれば、「生物は自らの生活を営むために目的的・能動的に環境と関わり合い、自分にとって最適の環境を形成して双方［生物と環境］がより均整のとれた一つの生態系を築いていく」とされる（平塚 前掲、p.16）。

このような考え方がもたらしたのは、従来ソーシャルワーク実践において支配的であった医学モデルからの転換であった。すなわち、治療の対象としてのクライエントから、環境に働きかける能動的なクライエントへ、人間観――正確にいうと、クライエント観――を転換させたのである。いうなれば治療の対象でしかない〈弱い〉クライエント像から、環境に能動的に働きかける可能性を有した〈強い〉クライエント像への転換である。平塚はこうした生態学的アプローチにおけるクライエント像の転換を、「生物に対する認識をヒューマニズムと結合させ、人間主義的な見解を再構成した」ものと捉える（平塚 前掲、p.16）。生態学的アプローチのもつかような考え方はやがてライフモデルと呼ばれる新たな認識論へと発展してゆく。平塚は「生態学的アプローチが実践モデルとして確立した段階に到達しているとは言い難い」（平塚 前掲、p.20）としながらも、「人間の福祉の向上という価値の一つと結びつけて科学の仕方を提供する点で」このアプローチは示唆的であると行論を締めくくっている。

平塚によって整理され、分析された生態学的アプローチの人間観は、基本的に能動的な個人をモデルとしている。生物は環境に働きかけ、自分にとってより快適な生活を切り拓いていくことができる。同様に人間も環境に働きかける可能性をもつというわけである。人間の場合、快適な生活を自ら切り拓いていく可能性を持つ一方で、その実現を拒むものもまた環境であるという点が生態学的アプローチでは指摘される[6]。

生態学的アプローチの予定する人間観を知ることがここでの課題であった。このアプローチの掲げる人間像は、基本的に近代的自我を備えた、近代的主体、デカルト的コギトを基底とする主体である。環境に働きかけることのできる

能力、自己実現できる能力、そうした可能性を潜勢させた個人を、「人間主義」の名のもとに前提していること、その部分に理性的主体への無批判な傾倒を垣間見ることさえできる。ソーシャルワークが近代の所産であること、そのこととソーシャルワークの価値としての人間観（＝デカルト的主体）に大きな変更を加えることの難しさが、ここでも曝露される。

2）社会構成主義アプローチ

次に、「ソーシャルワークにおける大きなパラダイム転換の予兆」を告げるアプローチとして、わが国でも1990年代以降注目されてきている社会構成主義アプローチに目を向けてみよう。野口裕二は、ソーシャルワークの新たな潮流を示すキーワードとして、「構成主義（constructionism）」「物語（narrative）」「ポストモダン（postmodern）」を掲げる（野口 1995: p.28）。野口によれば、ソーシャルワークの伝統的な見方からすれば、自己概念とは、環境との相互作用によって形作られるものという理解が一般的であったと指摘される（野口 前掲、pp.28-29）。しかし、このような見方は自己を「成熟した自己と未熟な自己」「安定した自己と不安定な自己」とに弁別するような結果を生み出すというのである。これに対し、構成主義のいう自己とは、言語及び解釈を通じて構成されるものであるという。すなわち、構成主義アプローチにおいては、自己が自らを説明する言説は、他者による言説を取り入れつつ、言語実践の場で不断に変形され構成し直される。ここから野口は、構成主義アプローチの志向する援助とは、「抑圧され権力をもたないひとびとが、自分たちの言葉で自分たちの要求を語る努力を援助することにある」（野口 前掲、p.29）と述べる。野口の述べるところは、抑圧を再生産するのは、権力機構や制度ではなしに、言語実践そのものにあるのであるから、文化的に従属的な位置に留めおかれたサバルタンも、抑圧を生み出すのと同じ言語レベルを語ることによって対抗する必要がある、ということである。野口によって紹介された社会構成主義アプローチ、わけても本稿でとり上げるナラティブ・アプローチは、「援助するもの－されるもの」という従来の援助関係の見直しに対する示唆を含んでおり、援助の軸足をこれまで以上にクライエ

ント側に移行させたものといえそうである。今のところ、援助関係のもつ政治性に最も敏感に反応したアプローチであるといえるであろう。特筆すべきは、社会構成主義アプローチが、その理論的支柱としてフーコーの権力関係論、およびそれと密接に関わるフーコーの主体概念を援用している点にある。

そもそもフーコーが権力を研究したのは、われわれの文化によって人間が主体化されてきた様式、すなわち服従を強いられてきた様式を歴史的に明らかにするためであった。主体化されることとは、すなわち人間が隷従化することである。この点において、まぎれもなくフーコーは、主体なるものがあらかじめあるのではなく、イデオロギーに呼びかけられることによって、はじめてひとは主体になることを喝破したアルチュセールの徒である。

「主体という語には二つの意味がある――支配と隷属という形で他者に依存していることと、良心や自己認識によって自らのアイデンティティと結びついていることである。どちらの意味も、従属させ、服従させる権力様式につながる。」(Foucault 1982=2001: p.15)

「権力は、軍隊の脅威をもって、コトバの効果で、経済力の差で、やや込み入った統制手段で、監視システムで、文書をもってあるいは口頭で、行使される。または、諸規則――明示的あるいは暗黙の、制定されたあるいは流動的な、すべてを行動に移す技術的手段をもっているかあるいはもたない――によって行使される。」(Foucault 前掲、p.28)

社会構成主義アプローチは、かくして援助関係という権力関係に焦点を当て、ソーシャルワークなる学知によって権力を行使する側に回りがちな援助者像を反省的に捉え返し、援助の軸足をクライエントにより移行させようとする。生きがたさを抱えたクライエントの「生きられた時間」を、クライエント自身に語らせ、その物語を「ドミナント・ストーリー」と措くことで、現象学的な香りを残しつつ、ドミナントな物語が、この社会が生み出した権力/言語実践の一つにしか過ぎず、書き換え可能であることを主張してフーコーの影響も強調する。なお、この時点の野口論文には「自己」と「他者」という

概念は登場するが、「主体」なる言葉は登場しない。ナラティブ・アプローチに関するいくつかの文献にも、主体という言葉はほとんど出てこない。ソーシャルワークの伝統的な価値観にある「理性的な主体」の概念は、フーコーを援用するナラティブ・アプローチにあっては否定的な響きを持つものとして後景に退き、替わりに「自己」と「他者」という言葉がそれにとってかわったかのごとくである。三島亜紀子が指摘するように、フーコーの思想がソーシャルワーク領域に援用されるようになって以来、「subject という語は慎重に用いられるようになった」（三島 2002: p.42）ことの証左ととるべきなのであろうか。しかし、主体という言葉が反省的に用いられるようになったとはいえ、近代的主体批判という問題が、社会構成主義アプローチのようなポストモダンソーシャルワークを標榜する立場において、はたしてどの程度解決されたのかについては、なお検討の余地があるように思われるのである。

批判――何が問題なのか

以下では、社会構成主義、わけてもナラティブ・アプローチについての批判的考察を行う。批判は、このアプローチにいう援助者の「専門性」と近代的主体との関わりをめぐって展開される。

野口は、ナラティブ・アプローチを解説・分析した『物語としてのケア』（2002）のなかで、従来のソーシャルワーク理論が依拠してきた、因果関係に固執する態度を批判している。これまでのソーシャルワークにおいて支配的だったのは、クライエントに生活問題を生じさせている当のものを探り当て（つまり「原因」を究明し）、原因と見なされたものを除去したり、改善したりすることで、当該問題を解決するという発想法であった。しかしながら、野口は、原因探しでは一向に埒があかず、むしろ余計に問題をこじらせる例があると述べる（野口 前掲、p.86）。ここでは、野口の解説に依拠しながら、もう少し社会構成主義アプローチの立場を見ていくことにしよう。

社会構成主義アプローチでは、因果関係を究明し、もって問題解決に導くという発想法をとらない。社会構成主義による新しいモデルは、「テクストの読み」に着目したものである。クライエントの人生を、「人生というテクスト」

としてみた場合、このテクストが開かれたものであり、多様な読みが可能であることをこのアプローチは主張する。テクストが開かれているということは、クライエントのテクストが常にオルタナティヴ・ストーリーに書き換え可能であることを意味する。野口は、原因を特定し、それを除去することで問題解決に至るはずだという考えは、「真理」なのではなく、援助者にとっての「最強のドミナント・ストーリー」ではないかと述べる（野口 前掲、p.87）。

さて、社会構成主義アプローチをとる援助者は、「クライエントの生きる世界」について無知であるという姿勢をとらねばならない（野口 前掲、p.97）。なぜなら、援助者のもつ専門的知識や理論を用いた対話は、援助関係を権力的なものに転化させるからである。「専門知には権力が内在している」（野口 前掲、p.139）。すなわち、「『専門用語の使用』は、クライエントの世界を一方的に切り取る主要な装置となる。」（野口 前掲、p.139）のである。「無知の姿勢」を貫いてクライエントと対峙し、ともに新しい物語をつくっていくこと――これを野口は「きわめて高度な専門性」（同、p.99）と述べるのである。いわく、「無知の姿勢」で臨むことは素人にはできない、なぜなら素人はそれまでの「生きられた経験」にもとづく自分なりの「経験知」をもっていて、物事を解釈したり判断したりするからだ、というのがその理由である。ここで次のような疑問が生じる。「無知の姿勢」を貫く援助者は、「生きられた時間」にもとづく価値を宙づりにできる人びとであるということになろう。はたしてそのようなことが可能なのか。しかし、それよりもさらに重要な問題は、社会構成主義アプローチが描く援助者像である。そもそも「無知の姿勢」を自覚的にとることが「できる」人びと、従来のアプローチを批判的に退け、新たなアプローチを自覚的に選び取ることが「できる」人びととは、（反省的）主体以外の何物でもないのではないか。社会構成主義によるソーシャルワーク理論は、フーコーの主体概念、権力概念を援用する。それが、無知の姿勢というキーワードに依拠する新たな専門知の枠組であるとする。この新しい専門知の立場からは、「主体化」と「物語」は次のようなシェーマを描くことになるだろう。援助者は主体化作用に自覚的であることによって、ミクロ政治の磁場から身を引き剥がそうとする。クライエントはすでに主体化されているであろうが、主体化された彼／彼女らの語るフーコー的主体の物語が「ド

ミナント・ストーリー」なのだ。援助者は主体化のプロセスから完全に自由にはなれないかもしれない。しかし、援助者が知と権力の関わりを自覚しているだけでも、そうしたものの見方を知らない従来の援助者よりは、はるかに主体化作用のくびきから解き放たれているのだ、とナラティブ・アプローチを支持する人びとは主張するかもしれない。しかし、そこまでこのアプローチが歩みを進めたのであれば、専門性という言葉も再考すべきものとして、俎上に乗せるべきである。

社会構成主義アプローチは、「専門職」「専門性」という概念を手放さないがゆえに論理的隘路に行き着く。社会構成主義アプローチの新しさは、専門知という価値には届かない。この点につき、いかなる新しいアプローチといえども、専門的に援助をするためのアプローチなのだから、「専門職」が行うのは当然であるとするのは、拙いトートロジーである。社会構成主義、わけてもナラティブ・アプローチが提唱する「ポストモダン」の射程には、専門知に内在する近代性の問題は入ってこないのである。新しい物語をともに作っていくこと、この作業をなぜ「専門性」とか「専門家」といった古い枠組を用いて語らねばならないのか？専門家／素人という二分法をあえて用いるのはなぜか？専門性や専門家といった言葉自体に、すでに権力性が内在しているのではないか？「無知の姿勢」をとることで、価値を宙づりにし、専門的知識を用いないことで援助の権力性を払拭しようとするなら、専門家という手垢にまみれた概念も宙づりにすべきなのではないか？フーコーが権力に着目したのは、それが近代的主体研究(より正確には主体を形成する主体化作用の研究)のために有効であったからである。しかし、権力や政治性に敏感な社会構成主義アプローチをとる援助者は、思惟する、理性的な〈主体〉としての自己を放擲することはないのだ。専門知をもちながら、それを主体的に用いない専門家とは、近代がモデルとしてきた自らを反省的に律する主体像とどこがどう決定的に異なるというのだろうか。おそらく、ここには議論上の亀裂がある――デカルト的コギトと、フーコーによって示された隷属する主体との、混同と混乱が。

結論を述べよう。社会構成主義アプローチは、確かに知と権力の関係に着目することで、従来とは異なった新たな援助のモデルとなりえた。しかし、

思惟する主体という意味での近代的主体批判という問題に、ラディカルに迫ることはできなかった。それはなぜか？それは、援助者が専門性に裏付けられた専門家という自らの地位を、決して手放そうとしないからである[7]。専門性を強固に保持し続けようとすることこそが、援助者にとっての〈最強のドミナント・ストーリー〉なのではあるまいか。そもそも権力と無縁な専門性というものが存在するのか。ナラティブ・アプローチははたして援助関係と権力作用の問題を、解決しえたのか。このアプローチが、援助者による力の行使を超えでたと、言い切ることが可能なのか？

結

おそらく、根本的な問題はもっと別のところにある。それは、援助に関する最もラディカルな問いが、いまだ封印されていることだ――たとえば、援助者自身が「自分は善いことをしているのであろうか」という問いを事実上封印しているように。マーゴリンが指摘するごとく、「ソーシャルワークに『善い行いをする』能力がそなわっているという信念は、ソーシャルワークの基礎となる前提である」（Margolin 1997＝2003: p.386）ため、援助というのは常にプラスの価値しか付与されない。フーコーがいくら生－権力の存在を暴いたところで、ソーシャルワーク自体の存立理由を危うくすることはない。ソーシャルワーク実践への懐疑は、「すでにある手続きや方法を改善すれば解決される『内部の者』の問題になる」と、マーゴリンは述べる。「自己批判は、ソーシャルワークの専門職としての正当性を強化する程度のものである限りにおいてのみ存在する」（同、p.386）とも、マーゴリンはいう。自らの行いの内容を、善きものと確信しようがしまいが、ソーシャルワークは今後も専門職という概念を手放さないであろう。おそらく、その理由の大部分は承認の政治に関わっている。加えて、専門性という概念は、ソーシャルワーカーの自己同一性にとって大いに有用なものである。彼・彼女らにとって専門性はみずからを守ってくれる砦なのである。「援助する」という行為は、他者の苦しみを引き受けるという側面を持つものである以上、援助者にとっても精神的な負荷が大きい行為であろう。専門職は「他者の苦しみに憑衣される」（レ

ヴィナス）ことから自らを守るために、これまでに蓄積されたさまざまな技法や知恵を駆使する。その場合、専門職、専門性という言葉を用いずに自らを守る途はないのであろうか？新しい知の枠組を探すこと、それを実践することを単に「専門性」と呼称しているだけなのだという見解もあるだろう。しかし、社会構成主義が明らかにしたように、言語実践が権力作用であることを思えば、既存の「専門職」「専門性」という言葉を、もはや安易に用いるべき時代は過ぎ去ったと思われるのである。ソーシャルワークにおける価値の問題は、主体批判や主体化作用の考察を経、かくして専門性の捉え直しに逢着した。もとより、ソーシャルワークの価値は常なる問いかけの対象である。それが実践の方向性を定めるものであるなら、われわれはより周到に、その内実を見定める作業を続けていかねばならない。同時に、ポストモダン思想により宙づりにされた（はずの）専門性の内実を、改めて吟味する必要があるものと考える。

注

1　主体化作用を問題にするのは、フーコー＝ドゥルーズ的視点である。より正確には、フーコーと、ドゥルーズ＝ガタリの仕事といった方が良いであろう。小沢秋弘が示唆するように、主体化作用に焦点づけるのは、まさしく、現実をどう切り取るかという問題に関わっている。主体を人のこころの内奥にあるものと捉えるのではなく、それを外部から眺めて、「いかにしてひとは主体になるのか」を分析するのが、主体化作用に焦点を当てた哲学の方法だといえる。

2　政治による包摂性の暴力的な力を描いたのがスピヴァクの『サバルタンは語ることができるか』であった。文化的に従属的な地位におかれた行為体が語ることができなくなるのは、行為体が一人残らず政治の磁場に引き寄せられ、体制に組み込まれているからなのだ。行為体のことばが翻訳されないままに留め置かれること、ことばが聞き届けられないまま放置されること――それは特定の集団に帰属する行為体が、政治の力の磁場から排除されているからではない。そうではなく、支配的な言説を語ることができる行為体も、支配的な言説を語るようにしむけられている行為体も、一人残らず政治の磁場に組み入れられ、しかし、にもかかわらず、

彼女／彼ら（＝サバルタン）は存在しないものとして、あるいは見えないものとして扱われてしまうことの方が問題なのだ。こうしてすべてが政治の磁場という内部に取り込まれることによって、その中で支配的な言説を語るもの、語る能力があると認可されたものは主体と名づけられることになる。主体は継ぎ目なく連続し、磁場の内部で生産をつづけようとする。しかし内部も外部もない、すなわちすべてが内部であるような連続体、継ぎ目のない連続体といった主体のイメージはたやすく破られることになるだろう。

3　デカルト的コギト、主体の概念は、科学の発展を推し進める一方で、人間こそが自然の支配者であるという態度をあらわにしていった。その結果はいうまでもないだろう。人間こそが自然の支配者であるという態度は、自然環境の破壊をもたらした。同時に、デカルト的コギトに裏付けられた科学の支配力は、当の人間をも科学的操作の対象とするに至る。ES細胞やクローン胚などを応用する技術を人間が獲得するようになったことで、生命倫理に新たな課題が持ち込まれた。

また、デカルト的コギトは、「自我」の概念を見出したことでも知られる。「思惟するもの」（res cogitans）としての自我である。「私とはなんであるのか。考えるものである。では、考えるとはなんであるのか。すなわち、疑い、理解し、肯定し、否定し、意志し、意志しない、なおまた、想像し、感覚するものである。」（デカルト『省察』＝1978: p.249）この一文には、「思惟スル」とはなんであるかがよく示されている。デカルトを淵源とする近代的自我の概念は、ロック、ヒューム、フィヒテらを経て、やがてヘーゲルによって完成されるのだが、その後は、ジェームズ、コフカ、ケーラーなどさまざまな心理学的自我論へと展開する。このように、近代的主体と自我は、デカルトを祖とするという、水脈としては同じ源を持つものである。

では、自我と主体とは、どう切り分ければよいのか。私というものは意識しなければ対象化しえない。私が私を反省的に対象化したとき、対象化された私を自我と呼ぶ。そして自我を考えることのできる私を、私によって対象化されつつある私も含めてコギトと呼ぶ。「考える私」と「対象となる私（自我）」を分離するということ、これはデカルトがまさに、必要とした考えであった。デカルトは懐疑論から出発し、全てを疑ってもなお疑うことのできない究極の根源的存在を求めていた。デカルトが辿り着いた結論は、「自我を考えられる私がいること」は疑

いえない、というものであった。かくして、コギトは存在するもの・ことを保証する〈基盤〉となったのである。デカルトが辿り着いた「思惟する私」と「自我」の分離は、主客分離とも呼ばれる。さらに、ここから、私において客体たるものを身体と措き、考える私を精神の側におく心身二元論が生じる。哲学上問題になるのは、コギトを第一基底とした場合、そのことによって私の存在は本当に保証できるのかという問題である。コギト自身は無限背進する。私とは誰か？それは思惟する私である、ということを思惟する私である、ということを思惟する私である…。以下これが延々と繰り返される。デカルトのコギトは自己言及的なのである。コギトを〈基盤〉としても「私」の存在は保証されない。

4　心身二元論は、さまざまなヴァリエーションを生んでいった。心理学においては、「私」において心の働き一般をなしている当のものをエゴと呼んだ。心理学における主客分離問題は、コギトとエゴの分離として示される。「ひと」というものは、対象化されうる「こころ」をもつものだというイメージが、そこでは前提されている。精神分析においてはイド（エスともいい、無意識の欲望のことを指す。）を検閲する精神の働きの審級をエゴと呼んでいるが、心理学でもエゴはそのような働きをもったものと見なされている。心理学においては、エゴを「私」がコントロールすることは可能とする見方があり、この見解によれば、コントロール能力が弱いとき、「自我が弱い」とされる。ここで自我というのは私（主体）のことにほかならない。心理学において、自我という言葉に曖昧な点があるのは、私＝自己＝エゴ（自我）という具合に、主客の分離線を不確かに引いたまま用語を使用する傾向があるからなのだろうか。これは、「私のこころの存在」が素朴に受け取られ、それを分析するという方法の結果ではないか？このように見てくると、研究方法や概念を、哲学よりも心理学から学んできたソーシャルワークの主体概念は、自我の概念と置き換え可能な部分が大であるように思われるのだ。

5　たとえば、松端克文「ソーシャルワークにおける主体性概念の検討」『ソーシャルワーク研究』Vol.22　No.4　1997、三島亜紀子「社会福祉学における『主体』に関する一考察」『ソーシャルワーク研究』Vol.28　No.1　2002などを参照されたい。

6　ここまでの論理展開には瑕疵がないように映る。しかし、全くないわけではない。たとえば、こういう問いを差しはさむ余地があるのではないだろうか？問いそのものはいたって素朴である。平塚も指摘するごとく、パワレスな人びとに対し、

こうした生態学的なアプローチによる支援が功を奏するのか。なぜなら、〈サバルタンは語ることができない〉からである。文化的に従属的な位置に置かれた人びとは、環境に働きかけるどころか、当の環境によって生を規定され――クライエントという地位にもつけぬまま――、福祉制度の外部に追いやられている。彼／彼女らの快適な生活を阻む当の環境に、彼／彼女らは受動的に適応することで、生を繋いでいる。しかも、彼／彼女らは多くの場合、声をあげることもない。そのような人びとに、生態学的アプローチはどう対応せよ、というのであろうか。聞き届けられない声を、どのように聞き取り、当該アプローチの提唱する「最適な環境」作りに手を貸すというのであろうか？そもそも彼／彼女らにとっての「最適な環境」とは何であるのかを、援助者は自らの価値にとらわれず判断することができるか？しかし、これ以上の詮索は止めにしよう。ソーシャルワークの概念／言語は、すべからず文脈依存的なのであるから、言葉尻を捉えて批判するというのは無駄なことだ。しかし、このことは付け加えておこう。さまざまな理由によって決定能力を一時的に喪失している人びとに、環境を変えるための働きかけをするというのは、その人びとに主体化を強制することになりはしないか、ということである。

7　ソーシャルワークがいかに「専門職」「専門性」にこだわり、専門的職業であることを承認されようと熱望し続けてきたかについては、三島亜紀子「医師とソーシャルワーカーの専門職化――A.フレクスナーの及ぼした影響を中心に――」（黒田浩一郎編『医療社会学のフロンティア』世界思想社、2001に所収）に詳しく述べられているので、参照されたい。

文献

Millet, K., *"Sexual Politics"* 1970＝藤枝他訳『性の政治学』ドメス出版 1985

Foucault, M., *"La volonté de Savoir"* 1976＝渡辺守章訳『性の歴史　Ⅰ：知への意志』新潮社 1986

Pelbert, P., *"L'écologie de l'invisible"* 1993＝安川慶治訳「見えないもののエコロジー」宇野邦一編『ドゥルーズ横断』河出書房新社 1994

Kaufmann, P., *"L'apprt freudien"* 1993＝コフマン編、佐々木孝次監訳『フロイト・ラカ

ン事典』弘文堂 1997

Descartes, R.,『省察』『中央公論社：世界の名著 27』1978

Descombes, R., 1989=「『主体の批判』と『主体の批判』の批判をめぐって」ジャン=リュック・ナンシー編　港・鵜飼ほか訳『主体のあとに誰が来るのか？』=*"Caheirsc Confrontation 20 : Apres le Sujet qui vient"* 現代企画室 1996

松端克文「ソーシャルワークにおける主体性概念の検討」『ソーシャルワーク研究』Vol.22　No.4　1997

三島亜紀子「社会福祉学における『主体』に関する一考察」『ソーシャルワーク研究』Vol.28　No.1　2002

Foucault, M., *"Surveiller et Punir : Naissance de la Prison"* 1975=田村俶訳『監獄の誕生』新潮社 1977

平塚良子「生態学的アプローチのパラダイム分析と今後の展望」『ソーシャルワーク研究』Vol.21　No.3　1995

野口裕二「構成主義アプローチ：ポストモダン・ソーシャルワークの可能性」『ソーシャルワーク研究』Vol.21　No.3　1995

Foucault, M., *"The Subject and Power"* 1982=渥海和久訳「主体と権力」『ミシェル・フーコー思考集成*IX*』筑摩書房 2001

野口裕二『物語としてのケア』医学書院 2002

Margolin, L., *"Under The Cover of Kidness : The Invention of Social Work"* 1997=中河、上野、足立訳『ソーシャルワークの社会的構築：優しさの名のもとに』明石書店 2003